ヤハタシンジョウ　八幡新庄　鹿島郡に屬し、藩政時代では、八幡の一村のみを含んで居た。

ヤハタナホナリ　八幡尙成　橘氏。元弘三年閏二月後醍醐天皇隱岐を遁れ、六月内裏に還幸し給うた。この月加賀國御家人八幡一分地頭彦七尙成が軍忠を抽んでる爲に馳せ參じ、その著到を御奉行所に報じたことは、菊大路家文書に見える。蓋し當時宮方であつた足利尊氏の勢に加つたものであらう。この八幡は何れの地か明らかでない。

ヤハタハマ　八幡濱　羽咋郡領家町領の海岸をいふ。往昔八幡村の富來八幡の神靈が八月朔日鎌倉鶴岡から此の磯に寄り給うたとて、毎年こゝに神幸がある。

ヤハタムシロ　八幡筵　文政の頃鹿島郡七尾の上村屋金右衞門が、松前から建筵を齎し、之に倣うて八幡村の恒右衞門・七之助に織らしめたに起り、八幡筵の名を以て今も製造輸出せられる。

ヤハラ　和　→ワギ　和義。

ヤバン　夜番　藩政時代に城下本町では、夜警の爲交番に亭主番の任に當るが、地子町又は門前地に在つては之に代るに夜番を以てした。夜番は各戸順次に之に當り、隣家の者を副とし、宵六つから曉六つまで、番の棒と拍子木を持つて各町を見廻つた。番の棒は樫の六尺許の棒で、頭は錫杖の如く金輪をつけ、尻に石突のあるもので、組合頭が之を預り、夕刻當番の者に渡したのである。町役人・能役者などは、夜番を免ぜられる例であつた。

ヤヒコバラヒ　彌彦拂　又彌彦送ともいひ、彌彦拂を訛つて彌彦婆々というた。藩政時代に土用の後から初秋に亙つて、城下金剛院・萬寶院・乾貞寺の當山派山伏が合同して行つた悪魔拂である。五彩の旗を立て、その紺色の旗には大日大聖不動明王、赤旗には降三世明王、黑旗に軍荼利夜叉明王、白旗に大威德明王、綠旗に金剛夜叉明王と記し、法螺を吹き、太鼓を打ちて行進し、經文を讀誦する者數人、その半は錫杖を打振り、舞手は白布を以て頭を包み、柿色の法衣と裁付袴とを着け、一人は笈に般若の面を納れ、一人は悪尉の面を有する。附屬の人夫には弓・鉞を携へ、唐櫃を擔ふ者がある。若し祈禱を乞ふ者があれば、武器を用ひざる舞料百八銅、弓・鉞の舞料百八銅と米二升、太刀の舞料百八銅の外に米三升を受ける。その行法、例へば太刀の舞なれば、讀經者並立して、錫杖を振りながら、東方降三世云々の文を唱へ、外縛の印を結ぶこと三次。この間に舞手は假面を着け、直立不動の姿勢を爲し、左手に太刀の鍔際を握り、臨兵闘者と九字の前半を切り、前進すること四歩半、次いで皆陣列在前と元の位置に復し、同時に太刀の鯉口を切り、中腰に捻つて天地左右を睥睨し、それから太刀を拔き、左右を切拂ふ等の狀を爲し、舞ひ終つた時は、讀經者法衣の裡で内縛の印を結ぶこと三次、錫杖を振り鳴らし、舞手は納めの九字を切る。彌彦拂は越後彌彦神社に何等かの關係があると思はれるが、同社に今かくの如き行事も記錄もないといふ。彌彦拂は今轉じて祭禮の餘興などに行はれてゐる。

ヤブイリ　藪入　藩政の時、正月十六日を藪入といひ、士家に召仕はれる下男・下女の郷里に歸つて一泊することを許した。士家では毎月十六日に休暇を與へたが、外泊を認めるのはこの月のみである。町家では今日より二十日に至る間に藪入を爲さしめた。盂蘭盆にも町家では七月十六日に藪入を許した。

ヤブタミヨウジン　藪田明神　石川郡額乙丸にあつて、本地十一面觀音を安置してあつた。

ヤブノシタ　藪ノ下　金澤柿木町のうち西光寺のある附近を、昔から藪の下と俗稱してゐたが、今はその名を呼ぶものがない。

ヤブマキ　藪卷　孟宗竹には雪害が少い。雪の重量によつて折れることがないでもないが、數に於いて多くないものである。だが苦竹や淡竹は縱横に亂れたり折れたりする。それを防ぐ爲に、藩政時代では數十竿を一つに寄せて、藁繩で結束した。藪卷といふのがそれで、特にその作業に熟練した日稼人夫があつた。

ヤブレガサ　破れ笠　一册。金澤の俳人既白編。序は辰のはる半化居士。京野田治兵衞板。寶曆十年既白が吉野・龍田に遊び、京洛から名古屋・越後を經て金澤に歸來した、その際の送別の句を主とし、俳話も一二載せられて居る。題號は閑更の序の中に『花の降日はうらやまし破れ笠』の句あるより採る。

ヤブロクエモン　藪六右衞門　藪氏は能美郡小野村の舊族で世々農を業とした。六右衞門寛政二年を以て生まれ、長ずるに及んで商を營み、京坂に往來してゐた。時に若杉に林八兵衞があつて製陶に從事し、大に盛況を呈したから、六右衞門は之を見て、その地方に好適なるを知り、乃ち若杉に往きて研究し、小野に窯を作り、文政二年始めて土物を燒いた。後鍋谷に原石を發見して藩の用品をも製し、名聲大いに擧つたが、天保十年窯を一針の善太夫に讓り、善太夫は十餘年を經て廢業した。後再び六右衞門の養子吉右衞門が經營し、附近之に倣うて製陶に從ふものが多かつた。明治五年八月七日六右衞門八十三歳で歿した。

ヤベアツシゲ　矢部阜茂　通稱順平、諱は阜茂、號は溫齋。父成尺天保三年歿してその祿三百石を襲ぎ、六年郡奉行兼改作奉行となり、十二年九月世子前田慶寧の傅に任じ、弘化四年大小將横目となり、步頭を經て、安政五年町奉行、文久元年小將頭に進んだが、元治元年疾を以て辭した。後又越中今石動支配等を命ぜられ、慶應二年小將頭から馬廻頭に轉じ、三年銃隊馬廻頭となり、明治二年三等上士頭、三年四月大屬に任じ、八月之を辭し、七年十月十一日六十一歳を以て歿した。阜茂、武を好んで劍を能くし、謠曲・插花・俳諧を嗜み、最も臨池の技に長じた。

ヤベカクザエモン　矢部覺左衞門　七左衞門の子。元和七年前田利常に仕へ、祿加增共に二百石に至つた。

ヤベシチザエモン　矢部七左衞門　もと江戸の人。慶長六年前田利常夫人の入輿した際、從行して金澤に下り、寛文四年歿。子孫四家に分かれ、皆世々藩に仕へる。

ヤヘムグラ　八重葎　もと二册本であるが、今花の卷(下)のみを存する。越中の俳人北空の著といふが、金澤の友琴一門の句集で、京の轉石・徹士・可休、江戸の其角・嵐雪などの作も交つてゐる。金澤三箇屋五郎兵衞・京井筒屋庄兵衞の兩板で、元祿八年の編纂であら